

平成20年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ継続プログラム
「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」教育プログラム
「学生による国際的研究セミナー」実施報告書

平成 20年 1月 8日

教育プログラム推進委員会 殿

国際的研究セミナーの実施について、下記のとおり報告します。

記

(以下の報告については、HP 上での掲載及び印刷物等として公表される場合があります。)

1. 氏名 (代表者)	フリガナ 長崎 愛
2. 所属等	大学院人間文化研究科博士（前期・後期）課程 住環境学 専攻 2回生
3. 共同実施者の 学生氏名・所 属等	1. 咏梅 （人間文化研究科 博士後期課程 社会生活環境学専攻） 2. 河合由香里（人間文化研究科 博士前期課程 住環境学専攻） 3. 蔡柏玲 （人間文化研究科 博士前期課程 住環境学専攻） 4. 野村理恵 （人間文化研究科 博士後期課程 社会生活環境学専攻）
4. セミナー等 の名称	内モンゴルと日本の文化を学ぶ多文化共生国際セミナー
5. 開催地	都市名 奈良県 吉野郡 川上村 会場 匠の聚及び林業資料館

6. 開催期間	2008年 10月 20日～ 2008年 10月 22日
7. セミナー等の講師	烏日斯嘎拉 (中国 内蒙古大学 蒙古学学院 教授) 呼日勒沙 (中国 内蒙古大学 蒙古学学院 教授)
8. 開催規模	(開催規模はおおよその数で結構です) 参加者数 21名
9. セミナー等の内容 <p>本セミナーは、独立行政法人・日本学生支援機構の国際事業で、奈良女子大学として採択された国際交流セミナーの一環として実施されるものである。本学学生、内蒙古大学学生を対象に、内蒙古大学教員による内モンゴル文化についての講義を受け、日本の歴史的地区、都市、中山間地域でのワークショップを実施することにより、日中双方の文化相互理解を深め、グローバリゼーションが進む中で、生活のアイデンティティをどのように考えるべきか、互いの生活や文化について学ぶことを目的とし、実施した。</p> <p>林業資料館を見学すると共に、吉野林業の特徴的な施業方法である長伐期・多間伐について、吉野材の特徴や吉野林業の歴史等について学んだ。さらに、樽丸工場を訪れ、製作工程や作業風景を見学し樽丸を作るようになった経緯等についても学んだ。</p> <p>また、日本の歴史的な住宅を見学し、日本建築の住宅様式について学び、こんにやく作りを見学、体験した。</p> <p>川上小学校では、授業風景を見学すると共に、内モンゴルの紹介や川上村の紹介、歌や内モンゴルの民族衣装の紹介、日本の子ども達の遊びを体験する等行った。</p> <p>内蒙古大学のウリスガル先生とフリラシャ先生からは、内モンゴルの生活と文化についての講義をしていただいた。</p>	

10. 成果及びその他参考となる事項

(この事業で得られた成果について記載願います。「生活環境の課題発見・解決に関わる成果」は必ず記載。)

川上村はこれまで三大林業の一つである吉野林業で有名な地であり、林業を基幹産業としてきた。本セミナーでは、山間部に位置する川上村で、2泊3日の日程で吉野林業の歴史や施業方法、木材について等を中心に山間部における人々の暮らしや子供たちの生活についても学んだ。

内蒙古大学学生にとっては、山間部での暮らしや産業等、見るのが初めてであり、非常に熱心で真摯な態度で学んでいた。また、本学学生にとっても山間部でこのような学びの場を得ることは貴重であり、山間部の暮らしや林業についてより知識を深められた。

また、川上村で内蒙古大学学生と本学学生と一緒に宿泊したことで、内モンゴル、日本についてそれぞれの文化の相違点についても学ぶことができたように思う。内蒙古大学学生が日本の山間部を見て、過ごした感想で最も印象的だったことは、内モンゴルでは都市部と農村では生活環境や教育レベルに差があるが日本の場合は、電気も水道も通っており、教育水準にも差がないように感じたということだった。日本では都市でも農村でも教育は一定に受けることができ、電気、水道も使用できることが当たり前となっている。食文化やライフスタイルの相違だけではなく、このような国の環境の違いについても学ぶことができ、視野が広がるとともに内蒙古大学学生との交流を通じて、内モンゴルの文化についてだけでなく日本の文化についても改めて認識する機会となった点で、実りの多いセミナーであった。

また、内蒙古大学学生の常に興味を持ち、何かを学び取ろうとする姿勢はすばらしく、人を尊敬し、敬う態度についても見習うべき点があり、姿勢を正す思いだったという本学学生からの感想もあった。

このように本学学生にとってもその姿勢は見習うべきものであり、良い刺激になったと考えられる。

11. 指導教員の確認

平成20年 1月 8日

署名 中山 徹